明日の学校をともに考えるベネッセの教育情報誌

全国の校長先生に無料で年3回お届けしています

VIEW21

ビュー21
2014
Vol.3
小学版

PDF版では表紙写真を公開しておりません。ご了承ください。

特集

社会を生きる力を育む
――地域、家庭とつくるキャリア教育

総論　千葉大教育学部教授 **藤川大祐**

学校事例　京都府京都市立梅小路小学校 ／ 茨城県つくば竹園学園 つくば市立竹園東小学校
静岡県浜松市立元城小学校

外からの視点　キッザニア（KidZania）

私を育てた あの時代、あの出会い　静岡県藤枝市立青島北小学校校長 **近藤照子**

Benesse発 これからの教育　東京都杉並区立桃井第三小学校　タブレットによる意見交流で発信力を育み、思考を深める

ベネッセ教育総合研究所　http:/berd.benesse.jp

C O N T E N T S

VIEW21

［びゅーにじゅういち］

2014

Vol.3

小学版

特集

3 **社会を生きる力を育む**
――地域、家庭とつくるキャリア教育

4 総論
全ての教育活動を通して子どもと社会を「つなぐ」という意識を
千葉大教育学部教授 **藤川大祐**

8 学校事例1
全教育活動をキャリア教育の視点で捉え直し「生きる力」を育む
京都府京都市立梅小路小学校

12 学校事例2
小中一貫のプロジェクト学習で地域のために行動する力を育む
茨城県つくば竹園学園 つくば市立竹園東小学校

16 学校事例3
ものをつくり売る起業体験で働く厳しさと本質を体感する
静岡県浜松市立元城（もとしろ）小学校

20 外からの視点
リアリティーや達成感を重視し「仕事は楽しい」という原体験を
キッザニア（KidZania）

連載

1 私を育てたあの時代、あの出会い
新しいことへの挑戦をためらわず 勉強する大切さに気付かされた
静岡県藤枝市立青島北小学校校長◎**近藤照子**

22 Benesse発 これからの教育
タブレットによる意見交流で発信力を育み、思考を深める
東京都杉並区立桃井第三小学校

24 読者のページ Reader's VIEW／編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。
また、敬称略とさせていただきます

*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

http://berd.benesse.jp 本誌記事は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイトでもご覧いただけます

私を育てた
あの時代、あの出会い
第18回

新しいことへの挑戦をためらわず勉強する大切さに気付かされた

静岡県 藤枝市立青島北小学校校長 近藤照子 KONDO TERUKO

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、近藤校長が語る。

こんどう・てるこ　専門教科は国語科。藤枝市立葉梨中学校、藤枝市立広幡中学校などを経て現職。1996年から2年間、静岡大大学院に長期派遣。藤枝市立青島北中学校教頭を務めた後、同校区の藤枝市立青島北小学校校長に着任。

- 1981（昭和56）
  新採として
  熱海市立熱海中学校
  に赴任
- 1985（昭和60）
  静岡市立服織（はとり）中学校
  に赴任
- 1987（昭和62）
  藤枝市立葉梨中学校
  に赴任。
  1990年から6年間、
  「静岡県中学校
  学力診断調査」の
  作成委員を務め、
  桑高文彦先生の
  指導を受ける

葉梨中学校で3年間
持ち上がった学年団。
左端が近藤先生、
右から2番目が
長谷川彌生先生

- 1997（平成9）
  藤枝市立青島北中学校
  に赴任
- 2003（平成15）
  藤枝市立広幡中学校
  に赴任
- 2009（平成21）
  藤枝市立青島北中学校
  に教頭として赴任
- 2013（平成25）
  藤枝市立青島北小学校
  に校長として赴任

博識ぶり、洞察力の深さに自分の勉強不足を痛感

私は38歳から2年間、静岡大大学院に長期派遣で通いました。今までの経験の蓄積でその後の教師人生を乗り切るのではなく、新しいことに挑戦していこうと思ったからです。そう思ったきっかけは、桑高文彦先生主催の勉強会への参加でした。私は当時、中学校の国語科教員で、県内でも国語教育に信望のあった桑高先生に学ぼうと考えたのです。

そこで予期せず、「静岡県中学校学力診断調査」の作成委員に任命されました。当時、私は30代前半でしたが、作問に対する意識は相当甘いものでした。選んできた問題文を提示すると、監修長の桑高先生に選定理由を聞かれました。「こういう人の推薦があったから」と答えると、「自分ではどう読んできたのか」「これで子どもの思考に沿った問題が出来るのか」と厳しい口調で問い正されたのです。そこまで考えていなかった私は、黙ってうつむくしかありませんでした。ただどんなに厳しくても、私は作成委員を辞退しようとは思いませんでした。先生はとても勉強家で、会議ではいつもびっしり書

かれたメモを手元に話をしていました。国語教育の大家でありながら学び続ける姿に、私は自分の勉強不足をただ痛感し、とにかくついていこうと作問に取り組みました。

また、勉強会では持ち回りで授業案を発表し、皆で検討しましたが、桑高先生の作品への洞察力は鋭いものがありました。例えば、芥川龍之介の『トロッコ』は少年の心情の変化を追うことが多かったのですが、先生は「少年の初めての大人体験の物語」の視点を指摘されたのです。そこに焦点を当てると、授業は全く別の展開となり、作品をより深く味わえるものとなっていました。過去の実践例の良い点を取り入れるだけでなく、古典であれば原文も読み込むなど、自分なりに作品を捉えて授業をつくる大切さを学びました。

作成委員や勉強会などを経験した私は、もっと視野を広げたいと思うようになり、大学院で学ぶ決意をしました。復職後、私の授業は大きく変わっていきました。ディベートやディスカッション、調べ学習の発表など、生徒の活動を授業の中心に据えたのです。中学3年生の3学期、高校1年生で扱う『羅生門』を読み、生徒が物語の続きを書いて、それを読み合う読書会を開きました。入試を控えた時期に受験に直接関係のない内容にもかかわらず、生徒は生き生きと取り組んでいました。そうした生徒の姿に、私は「今日はどんな授業にしよう」とわくわくしながら教室に向かうようになっていました。

先生方の思いを大切に 中学校の経験も生かす

今、全国で小中連携が進められていますが、私は教頭を務めた中学校の校区の小学校校長となりました。

管理職として手本としているのは長谷川彌生（やよい）先生です。私が30代前半、先生が学年主任を務めた学年団で3年間ご一緒しました。長谷川先生は上に立つ者のあるべき姿を行動で示されていました。ある時、担任の生徒への対応について、保護者から説明を求められました。長谷川先生は、担任を矢面に出さず、保護者に誠実に対応し、その場を収められました。また、三者面談の期間には毎日、全員が終わるまで職員室にいて、お茶を出しながらねぎらいの言葉を掛けてくれました。そうやって、保護者と何かあれば、すぐに相談できるようにしていたのです。最後は私が責任を取る――管理職としての気概を持ち、それを温かく示すことを長谷川先生の姿に学びました。

本校に赴任して1年半が経ちました。先生方が大切にしていることを私も大事にしながら、中学校での経験を生かした学校経営を心掛けています。例えば、生徒指導上の問題をすぐに共有できるように、生徒指導主任から「一報」として回覧しています。また、問題に対して初期段階から、担任1人ではなく、学年主任や教務主任、教頭などが必ず付いて対応することにしています。担任に精神的な負担を掛けず、また保護者や地域とのよい関係を継続できるようになればと始めました。

今後、道徳や外国語活動の教科化など、小学校でも新たな教育活動が始まろうとしています。新しいことへの挑戦をためらわないという姿勢が今こそ問われていると肝に銘じ、先生方を支えていきたいと思います。

「温かく誠実に対応し、最後は私が責任を取る」

特集

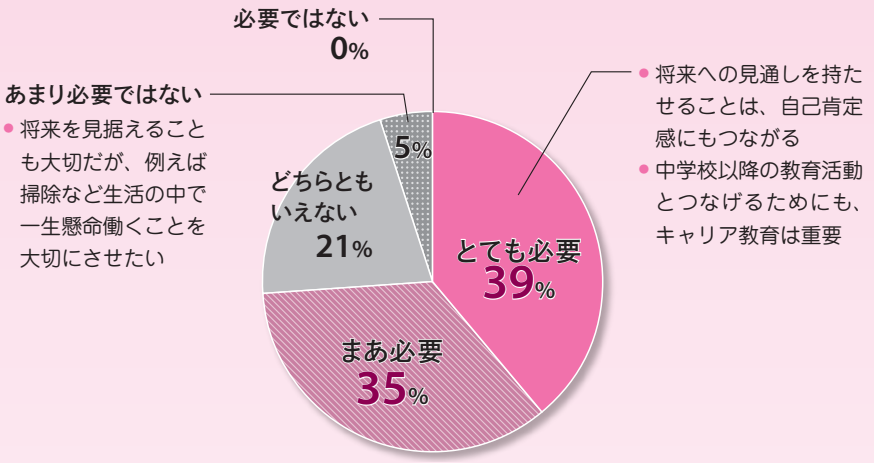
社会を生きる力を育む

――地域、家庭とつくるキャリア教育

小学校においても、キャリア教育の更なる充実が必要という意識が高まっている。
しかし、学校現場からは、教師間における温度差や、
中学校でのキャリア教育との違いが不明確であることを指摘する声が挙がっている。
本号では、子どもたちの「社会を生きる力」を育むために、
小学校が中心となって地域や家庭を
どのように結び付けていくことが望まれるかを考えたい。

キャリア教育の更なる充実が必要だと7割以上が感じている

Q. 小学校において「キャリア教育」の更なる充実は必要だと思いますか？



出典／『VIEW21』小学版読者モニターアンケート（2014年10月実施、有効回答数77人）

全ての教育活動を通して子どもと社会を「つなぐ」という意識を

千葉大教育学部教授　藤川大祐

社会の変化が予測しにくい時代となり、子どもが自ら未来を切り開いていく力を育てる必要性が高まっている。そうした状況にあって、小学校でのキャリア教育はどのように進めるべきか。キャリア教育が重視される背景や具体的な実践方法について、千葉大の藤川大祐教授に話を聞いた。

キャリア教育が重視される背景

子どもが"今"なりたい職業は"将来"存在しないかもしれない

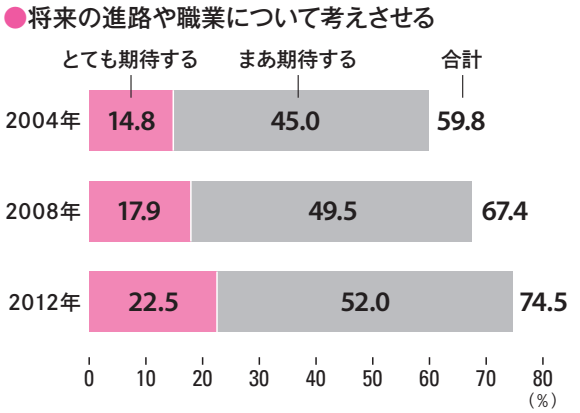
文部科学省中央教育審議会の答申で、1999年に初めてキャリア教育の必要性が示されてから十数年が経ち、子どもが将来について考える取り組みが進められています。しかし、その間にも就労状況は大きく変化し、これまでのキャリア教育を踏襲するだけでは十分とはいえなくなっています。

例えば、ITによる業務の省力化や機械化が進展し、今や、「コンピューターや機械に出来ない仕事は何か」という問いを突き付けられています。子どもが今なりたいと思っている職業が未来にあるとは限らず、今は存在しない職業に就く可能性が高いのです。

少子化の進行も、キャリア教育の必要性を高めています。選ばなければ誰でも大学に入れるという状況下では、選択肢が多い分、自分が何を学び、どこに進みたいのかをしっかり判断する必要があります。

こうした社会の変化に対し、保護者も職業観や進路について、子どもにどのようなアドバイスをすれば良いのか分からず、学校に求めているのかもしれません（**図1**）。加えて、新たな学力観では、生活経験によるところが大きい総合的な学力が求められるようになり、教育格差が広がっているとも感じています。例えば、「国内外の旅行に連れていく」「博物館や美術館に連れていく」「保護者の職場を見せる」といったことは、保護者の経済的、文化的な差により、子どもに経験格差が生じているのです。そのため、学校において豊か

図1　保護者の学校の教育や指導に対する期待



出典／ベネッセ教育総合研究所、朝日新聞社共同調査「学校教育に対する保護者の意識調査 2012」

な体験をある程度、保障することが求められています。

キャリア教育を必要としているのは、子どもだけではありません。人口減少が進み、地域によっては急速に過疎化が進んでいます。特に、小学校は地域の基盤ですから、地域の課題は学校の課題でもあります。これまでのように「地域に何をしてもらうか」ではなく、「子ども（学校）が地域に何を出来るか」を考えるべき時期にきているといえるでしょう。子どもが自分と深い縁のある地域に貢献することは、社会貢献の第一歩です。そうした体験は、子どもにとって貴重なキャリア教育となるに違いありません。

ふじかわ・だいすけ◎東京大大学院教育学研究科博士課程単位取得満期退学（教育学修士）。専門は、教育方法学、授業実践開発。各教科やキャリア教育、メディアリテラシーなどの授業づくりや学級経営に関する研究を行う。NPO法人企業教育研究会理事長。近著に『授業づくりエンタテインメント！―メディアの手法を活かした15の冒険』（学事出版）など。

キャリア教育の目標

縁や出会いを大切にし自分の強みを生かせる人材に

文部科学省は、キャリア教育で育成すべき力として「基礎的・汎用的能力」を示しています。いずれも大切な力ですが、広義の解釈が出来るので、取り組みに具体的に生かすためには各地域・各校の工夫が必要です。私は、これらに加えて、自分の強みを生かし、守りより「攻め」の姿勢を持つことを強調しています。IT化やグローバル化といった変化の早い社会に求められるイノベーションは、計画通りに進めるとか、自身に適性があるとかということに縛られず、周囲と違うことを考えられる人から生み出されるからです。そうしたことを踏まえ、キャリア教育の目標を次のように整理しました（P.6図2）。

●ルールやマナー

あいさつをしたり、電話を掛けたり、失敗したら謝ったり、締め切りを守ったりといった社会的なルールやマナーが身に付いていないと、何事も円滑に進められません。形式として身に付いていれば良いことも多いので、社会の基本として教えるとよいでしょう。

●取材能力

変化の激しいこれからの社会では、次々に分からないことが生じますから、人から知識を得る力がないと、社会に参加するのは困難です。キャリア教育の基礎として、特に力を入れて育みたい力です。

●協力獲得能力

ほとんどの仕事は協同作業で進められ、自分1人で出来ることには限りがあります。自分がしたいことを成し遂げるために、人の協力を得る必要があります。

●プロジェクト遂行能力

仕事を進めるためには、互いの違いを生かし、チームワークを発揮することが大切です。小学校でも、弱みを補い合い、個々の強みを発揮できる場面づくりは、更に力を入れる必要があるでしょう。

●社会貢献意識

仕事とは本質的に誰かのためにするもの、

つまり「利他的」なものです。「人のためになることをしたい」、言い換えれば、「社会貢献をしたい」という意識を育てましょう。

●自己肯定感

自分の良さを適切に理解し、他人と比べなくても、「自分はやれば出来る」という自己肯定感を持つことは、生きていく上での心の支えとなります。

●縁や出会いの尊重

近頃、「好きなことを仕事にしないと」という強迫観念のようなものがあるように思います。しかし、例えば、サッカー選手になれる人は限られますし、その時点で知っている職業にしかつながらないという難しさもあるので、こだわりすぎないことも大切です。「好き」や「正解」を求めて立ち往生するのではなく、「この地域に住んでいるから」「社長が魅力のある人だから」など、縁や出会いを大切にして、「当面はこれを頑張ろう」と前に進んでいけることも大切な力です。誰にも負けないという圧倒的な強みがなくても、「そこそこ得意」という2つ、3つの強みを組み合わせることで自分らしい力が発揮できていくものです。

●提案説明能力

仕事では、上司や客などの他者に提案や説明をする場面の連続です。進路選択では、保護者を説得することが必要になるかもしれません。自分がやりたいと考えていることを、諦めずに提案・説明する力を育てましょう。

地域の人々に喜ばれる経験が利他的な意識を育てる

キャリア教育では、地域の人たちに認められたり喜んでもらったりする経験も大切です。そうした経験があると、大人になっても「誰かの役に立ちたい」という思いを持つようになります。

「自分のため」の努力は妥協につながりやすいのですが、「誰かのため」の努力は継続させやすいものです。「人のために」という利他的な行いは、一見、自分を犠牲にするように感じるかもしれませんが、私は逆だと思います。自分のことしか考えられない人を、誰が応援してくれるでしょう。利他的な方が、周囲からの助けを得て、巡り巡って得することが多いはずです。キャリア教育では、利他的な意識も育ててほしいと考えています。

図2　キャリア教育の目標

社会に参加する基礎	ルールやマナー	挨拶すること、約束を守ること、相手の時間を尊重すること等、社会人としてのルールやマナーの基礎を身に付けていること
	取材能力	かかわりがなかった人のところに出掛けていき、その人の仕事や生き方について取材が出来る能力
協力に関する能力	協力獲得能力	自分が実現したいことのために、多くの人々の協力を得る能力
	プロジェクト遂行能力	互いの違いを生かし、チームで協力して活動する能力
かけがえのない自分	社会貢献意識	社会から受けた「恩」に報いることを目指し、社会に貢献できる「利他的な夢」を描こうとする態度を身につけていること
	自己肯定感	他者とは違う自分のよさを理解し、「一人でも世界を（少しは）変えられる」という感覚を持つ
戦略的な生き方	縁や出会いの尊重	遭遇した状況に応じて柔軟に計画を修正し、状況の変化を積極的に生かそうとする態度
	提案説明能力	さまざまな制約の中で実現可能な計画を提案し、周囲の人の理解を得られるよう説明できる能力

出典／藤川大祐、NPO法人企業教育研究会『企業とつくるキャリア教育』（教育同人社）

キャリア教育の授業のポイント

全ての教育活動は子どもの未来につながっている

キャリア教育の実践法についてお話しします。前提として、キャリア教育は「将来につながる」という意味で、全ての教育活動を通して行うべきものです。これは道徳が道徳の授業だけではなく、全ての教育活動と関連しているのと同じことです。

教科学習も例外ではありません。例えば、社会科は、社会が発展してきた歴史をたどることで現在の状況を理解し、将来に向けてどのような意思決定をすべきかを学ぶ教科です。しかし、ともすると、出来事や年号を

覚える暗記教科になってしまってはいないでしょうか。

もちろん教科や活動によって濃淡はありますが、基本的には全ての教育活動は将来につながっている。そのことを踏まえて、「直接的なキャリア教育」と「間接的なキャリア教育」に区別すると、分かりやすいと思います。

「直接的なキャリア教育」は、自分の将来について考えたり、職業について調べたり、地域社会で体験活動をしたりする学習活動で、既に多くの学校で取り組んでいることでしょう。それも大事なのですが、小学校段階では、むしろ「間接的なキャリア教育」を重視してほしいと考えています。

「間接的なキャリア教育」を進めやすいのが、係活動や委員会活動です。こうした活動に積極的に取り組まない子どももいますが、それは、きちんとやっても褒められないのに、さぼったり失敗したりすると叱られるという「報われない活動」だからではないでしょうか。係活動や委員会活動をキャリア教育と捉え直し、各人の仕事に感謝を伝え合う時間を設けるなどすれば、責任感が芽生え、もっと改善しようという気持ちが生まれるでしょう。実際に社会に出れば「報われない仕事」と感じる場面もありますが、そうした社会の課題に目を向ける機会にもなるはずです。

多様な大人に会う体験をさせることも、大切なキャリア教育です。教師と保護者以外の大人と緊張感を持ってコミュニケーションを図ることで、子どもの世界は広がります。

お勧めは、大人に主観的に人生の良い時期や悪い時期を波線グラフにかいてもらい、話してもらうことです。子どもは、夢というと将来の目標に向かって真っ直ぐに向かうようなイメージを持ちます。しかし実際には、人生にはいろいろあり、失敗しても立ち上がり、やるべきことを見付けて進んでいくことを、多様な大人を通して見せてあげてください。

教科学習でも「間接的なキャリア教育」が主となるでしょう。例えば、国語科でインタビューをする学習では、地域の人を招いて人生観や職業観を掘り下げて聞くようにすれば、効果的なキャリア教育となります。全ての単元では無理ですので、社会とつながりやすい単元をうまくキャリア教育に関連付けていくとよいでしょう。

先生方への期待

先生自身が社会に目を向け子どもに新しい情報を発信する

先生自身が社会の動きに目を向けることも不可欠です。多忙だとは思いますが、読書やインターネットで情報を得たり、年数回でよいので校外の研修会や講演会に参加したりする時間をつくってください。あたかも呼吸するかのように外界から新しい情報を吸収し、固定観念などを捨てていくイメージです。外部の空気を取り入れて、先生自身が自然とこれからの社会を示していきましょう。

先生が1人で背負い込みすぎないことも大切です。これだけ急速に社会が変化しているのですから、1人で全てを教えることは難しいでしょう。必要に応じて地域や保護者の力を借りれば、先生の負担は大きく軽減されますし、教育効果も高まるでしょう。

また、企業やNPO法人と連携することでも、キャリア教育に厚みが生じます。外部の教材やプログラムは、先生自身も学ぶ機会になるでしょう。今は広域の出前授業に協力してくれる企業が増えています。文部科学省のウェブサイト「子どもと社会の架け橋となるポータルサイト」（＊）では、社会貢献の観点から学校への支援を提案する企業と、支援を求めている学校をマッチングしています。

そして、子どもにとって、社会を垣間見ることが出来る最も身近な大人の1人が、先生であることも忘れないでください。先生が未来の社会をつくるために貢献しているというような前向きな姿勢を持てば、子どもは大切なことを感じ取ってくれるでしょう。授業でも、先生ならではの情報を伝え、社会とのつながりを意識させることも立派なキャリア教育です。その日、その時間、その子たちに向けて伝えたい一言があるか。そのような観点で授業を考えていただければと思います。

＊子どもと社会の架け橋となるポータルサイト http://kakehashi.mext.go.jp

全教育活動をキャリア教育の視点で捉え直し「生きる力」を育む

京都府 京都市立梅小路小学校

京都市立梅小路小学校は、京都市が推進する「生き方探究教育」を土台に、教科学習や道徳、係活動、地域での体験活動など、全ての教育活動で子どもに身につけたい力を、キャリア教育の視点で捉え直す研究を進めている。地域での体験活動を教科等に計画的に取り入れ、社会での実践力を培い、6年間の体系を重視した指導によって、子どもに「生きる力」につながる確かな成長が見られている。

取り組みのねらい

- 夢に向かって粘り強く前進し、失敗しても諦めない子どもを育てる
- 友だちや保護者、教師、地域の人々に支えられていることを実感させる

取り組みの内容

- 子どもに身につけたい4つの力についてルーブリックを作成し、具体的なイメージを教師間で共有
- 道徳や学級活動、児童会活動をまとめて「梅っ子学習」として系統化
- 係活動にPDCAサイクルを取り入れ、子どもが自分の役割に責任を持って取り組むようにする
- 地域での豊かな体験活動を計画的に行い、学校での学びを社会での実践力へつなげる

取り組みの成果

- 自己肯定感が高まり、自分に自信をもって主体的に学習に取り組み、使命感が育ってきた
- 子どもに地域の一員という意識が芽生え、地域に感謝し、貢献したいという気持ちが強まった
- 教師間の指導への共通理解が進み、指導観や授業が変わっていった

取り組みのねらい

周囲の応援を支えとして一歩を踏み出す力を育てる

京都駅の程近くにある京都市立梅小路小学校は、古都の伝統を守り続ける地域の人々と連携した教育活動を展開している。隣接する梅小路公園や京都水族館、京都市中央卸売市場や昔からある商店街などが、学校だけでは得られない学びの場となっている。加村和美校長はこのように話す。

「学校教育だけで子どもは育ちません。保護者や地域住民には地域ぐるみで子どもを育てようという思いがあり、学校が橋渡しをし

School Data

◎安寧小学校・大内小学校が統合し、1996（平成8）年開校。2013年、キャリア教育文部科学大臣賞受賞。2013年から文部科学省「コミュニティ・スクールの推進への取組に係る事業の調査研究」指定校。

校長	加村和美先生
児童数	263人
学級数	12学級（うち特別支援学級２）
所在地	〒600-8835 京都府京都市下京区観喜寺町３
TEL	075-371-7303
URL	http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=104302
公開研究会	毎年実施の予定（時期は未定）

社会を生きる力を育む――地域、家庭とつくるキャリア教育

て協力をお願いしています」

同校の子どもは素直で優しく、課題には前向きに取り組む気持ちが強いが、困難にぶつかるとすぐに諦めてしまうことがある。

「夢に向かって粘り強く前進し、失敗しても諦めずに問題を解決していく子どもを育てたいというのが、私たち教師の思いです。友だちや先生、保護者、地域の人々などの応援に支えられ、子どもが次の一歩を踏み出す力を育てています」（加村校長）

京都市では、保育所・幼稚園から高校にわたり、地域・社会とのかかわりの中で生き方を考え、生きる力を育む「生き方探究教育」を推進している。市が育てたい子ども像を示し、各校の裁量で発達段階に応じたキャリア教育を実践している。同校は2011年度から、「生き方探究教育」の視点で全ての教育活動を整理する研究を進め、14年1月には「第2回全国小学校キャリア教育研究京都大会」で研究報告を実施した。

目標は、「かかわる力（人間関係形成・社会形成能力）」「見つめる力（自己理解・自己管理能力）」「やりとげる力（課題対応能力）」「向かう力（キャリアプランニング能力）」の4つの力を育てることだ。研究主任の田野早苗先生は次のように説明する。

「文部科学省が『基礎的・汎用的能力』として示す4つの力を、イメージしやすいキーワードとして設定しました。全教科の授業に加え、道徳や係活動、学活など、あらゆる教育活動において、4つの中のどの力を育てるかを意識して指導計画を作成しています」

取り組みの内容

ルーブリックを作成し4つの力を教師間で共有

研究を進めるうちに、教師間で4つの力の捉え方に差があることが分かった。そこで、それぞれの力について具体的なイメージと明確なゴールを共有するため、発達段階ごとのルーブリックを作成した（図1）。

「4つの力は、『○○が出来る』といった形ではなく、『○○しようとしている』というような姿勢や態度として表れることが多いため、評価が容易ではありませんでした。しかし、教師間で評価の基準をそろえなければ、しっかりとした力は育たないと考え、ルーブリックを作りました」（加村校長）

ルーブリックは、指導計画の作成や教育活

図1「生き方探究教育の視点から、めざす子どもの具体的な姿」（抜粋）

			低学年	中学年	高学年
人間関係形成能力	かかわる力	互いを認めともに学ぶ力	表現	・楽しんで話し合いに参加し、自分の考えを最後まではっきりと話そうとする	・自分の考えを進んで発表し、相手にわかりやすく伝えようとする	・話し合いに進んで参加し、自分の考えを根拠をもってわかりやすく伝えようとする
			協働	・友だちの考えを最後まで聞き、よいところを見つけ、仲よく活動しようとする	・友だちの考えを聞き、いいところを取り入れたり、違いを認めたりして、より良くしようとする	・友だちの考えや立場を認め、目的に向かって、高め合おうとする

上記と同様に、課題対応能力、自己理解能力、キャリアプランニング能力についても、「めざす子どもの具体的な姿」を明確にし、教師間で共有した
＊同校の資料から一部抜粋して編集部で作成

京都市立梅小路小学校校長
加村和美 かむら・かずみ
「校長という立場ではなく、人間として、誠心誠意、先生、地域、子どもと向き合いたい」

京都市立梅小路小学校
田野早苗 たの・さなえ
研究主任。「子どもから学び、共に成長したい。笑顔あふれる授業をつくり、ずっと学ぶ姿勢を育てたい」

京都市立梅小路小学校
徳地美穂 とくち・みほ
学力向上部長。6学年担任。「自分が教えるだけではなく、常に子どもから教えられていることを忘れない」

京都市立梅小路小学校
厚地あゆみ あつち・あゆみ
学習指導部長。3学年担任。「自分が楽しんで主体的に学ぶ姿勢を示し、子どもにも楽しんで学んでもらいたい」

京都市立梅小路小学校
山口信也 やまぐち・しんや
情報教育主任。5学年担任。「『こんな学級にしたい』という目標を持ち、実態を踏まえて取り組みを工夫する」

動の中で子どもの成長を捉えることに活用している。また、その内容を基に子どもにアンケートを実施して取り組みを振り返り、指導の改善に生かしている。

道徳や学級活動、児童会活動を「梅っ子学習」として体系化

4つの力を育てる柱となる教育活動の1つが、各学年で年間35時間行う「梅っ子学習」だ。「生き方探究教育」の視点から、道徳や学級活動、児童会活動を捉え直し、各学年の年間計画を作成した。年間計画では、各活動で4つの中のどの力を育てたいかを明確にし、学年間で体系的に指導している（**図2**）。

学力向上部長・道徳主任の徳地美穂先生は、「梅っ子学習」を通して育てたい子どもの姿について、次のように話す。

「『梅っ子学習』の範囲は広範ですが、高学年の道徳でいえば、失敗しても頑張り続ける大切さを学び、最後まで諦めずに夢やめあてに向かえる力などの育成に重点を置いています。例えば、駅伝の練習では、参加した全ての子どもが1日も休むことなく走り続けた姿などを見て、確かな成長を感じました」

道徳で培った頑張り抜く力は、学力の支えにもなると考えている。

「苦手な教科や難しい問題に対して、どれだけ踏ん張れるかが大事です。自ら頑張ろうとする内発的な意欲がなければ、どれだけ教師が働き掛けても持続しません」（徳地先生）

道徳は自分と向き合い、深く考える時間であり、新たな自分に気付いたり、友だちの異なる一面を見付けたりする機会にもなる。ある子どもが本音を発言したのを機に教室に温かい雰囲気が生まれたり、教科の授業ではあまり活躍できない子どもが率直な気持ちを表現したりすることもあるという。

図2　「梅っ子学習年間計画」5年生（抜粋）

	5年	かかわる力	見つめる力	やりとげる力	向かう力
4月	【児童会】梅っ子集会…1年生を迎える会	○			
	【道徳】「あいさつっていいね」《ともだちの日》	○	○		
	【学活】こんな高学年・学年になりたい		○		○
	【学活】係活動を決めよう	○			
5月	【学活・道徳】憲法月間の各クラスのめあて《ともだちの日》		○		○
	【児童会】梅っ子集会…委員長任命式・フレンドリーグループ顔合わせ	○			○
	【児童会】運動会係活動	○	○	○	○

行事ごとにどんな力を育てたいのかを示した計画表。学年ごとに作成している
＊同校の資料から一部抜粋して編集部で作成

PDCAサイクルを取り入れ失敗も糧になるとして見守る

係活動では、PDCAサイクルを強く意識していることも特徴だ。年度初め、学級で話し合って必要な係を決め、自分に合ったものを選ぶ。学習指導部長の厚地（あつち）あゆみ先生はこのように話す。

「『梅っ子学習』で決めた学級目標を念頭に置き、『より良い学級にするために』という視点で話し合います。自分たちが必要と考えたことなので、係活動にとても前向きです」

「生き物は毎日皆で世話をする必要があるから、係ではなく当番にしよう」といった意見が出ることもあれば、「こんな係があったら皆が楽しい」という思いから、給食の配膳時間に皆を楽しませる「お笑い係」、学級の一番を認定する「ギネス係」などが発案されたこともある。

係が決まったら、思いや見通しを持って計画を立て（Plan）、友だちと協力して主体的に活動し（Do）、活動を振り返って次の目標を立て（Check）、より良い改善策を考える（Action）という流れで取り組む。

「最も重視しているのは振り返りです。これによって次の意欲が生まれ、活動内容が改善されます。学級に貢献するのが係活動の目的ですから、自己評価だけではなく、友だちに『楽しんでもらえたか』『学級のためになったか』といったアンケートを取って振り返るようにしています」（厚地先生）

係活動は子どもの自主性に任せているため、教師が計画の実行は難しそうだと思っても、そのまま進める場合も多いという。

「失敗も経験しなければ、自ら気付いて改

善することはありません。学校での失敗は、社会に出る前の貴重な経験だと捉えています」（田野先生）

低学年から責任を持って係活動に取り組むことで、学年が上がるに連れて委員会活動や児童会活動、学校行事など、より責任の重い役割を果たせるようになる。

「上向きのスパイラル状に高い次元の役割を任せていき、その先には、社会における役割があると考えています」（加村校長）

豊かな体験活動を通じて地域の一員という意識が芽生える

地域の教育資源を活用した体験活動も積極的に行っている。

例えば、5年生の「総合的な学習の時間」は、「どうして人は働くのか」を考えさせることから始まる。この段階では実感のこもった考えは出てこないが、あえて疑問を持たせた状態で、市の教育施設における「スチューデントシティ（＊）」や地元の商店街などで体験活動を行い、自分なりの答えを見付けられるように促す。そうした体験をした上で、地域で働く人や自分を見守ってくれている人にインタビューをし、敬意や感謝の言葉と共に発信する活動を行う。5学年担任の山口信也先生は次のように話す。

「例えば、毎日、横断歩道で見守ってくださる方の思いを知り、自分が多くの人に支えられていることに気付き、感謝の気持ちを抱きます。そのように地域に目を向けるきっかけを与え、地域と子どもを結び付けることは、学校の大切な役割と認識しています」

この他、学区内の施設・大学・企業の協力を得て、各学年のめあてに合わせた体験活動を充実させている（**写真**）。地域とかかわっていくうちに、子どもには地域社会の一員という意識が芽生える。活動の振り返りでは、「私のふるさとはここだから、これからも大事にしたい」「将来、ここを離れたとしても、いつか戻ってこられる場所であってほしい」といった声があった。

写真　5年生の環境教育の一環として、地域の化学メーカーの研究者を招いた授業の様子。給食の時間には、仕事や職業観について質問する時間を設定してキャリア教育につなげた

取り組みの成果

高学年でも高い自己肯定感 教師が変われば子どもも変わる

同校では、4つの力を育てる教育活動は、すぐに成果が見られるものではなく、地道に積み上げることで将来にわたって花開くものと捉えているが、徐々に子どもに変化が見られている。

一般的に、自己肯定感は学年が上がるにつれて低下する傾向があるが、同校のアンケート結果では、高学年の自己肯定感に関連する項目が非常に高く、肯定の割合が、「自分の長所・短所がわかっている」92％、「まわりの人の役に立ったと思うことがある」83％、「今、学習していることは、中学生になったときに役に立つと思う」88％となった。

自己肯定感の高さは、地域との関係性の深まりも要因の1つと捉えている。

「子どもの姿はとても落ち着いていますが、地域に温かく支えられているからこそ、安心して自分の力を発揮できるのでしょう。本校児童の地域行事への参加率も高く、これは『自分も地域を大事にしたい』という気持ちの表れだと思います」（田野先生）

子どもの変化の裏には、教師の意識の変化があるという。

「子どもに身につけたい力を明確にし、指導の視点を統一したことが、教師の意識を変えました。教師の指導観や授業が変われば、子どもが変わり、学校が変わります。先の長い取り組みですが、『子どものために』という思いを最優先にし、地域と共に子どもの成長を支えていきます」（加村校長）

＊京都市の教育施設「京都まなびの街生き方探究館」において体験できる公益社団法人ジュニア・アチーブメント日本のプログラム。銀行、商店、新聞社、区役所などから成る「街」で、児童がそこに勤める社員や職員と消費者の両方の立場を経験することにより社会や経済の仕組みについて学ぶ。事前学習を含めたトータルの教育プログラム。

小中一貫のプロジェクト学習で地域のために行動する力を育む

茨城県 つくば竹園学園 つくば市立竹園東小学校

つくば市立竹園東小学校は、2小1中で小中一貫教育を行っている（施設分離型）。軸となる取り組みの1つが、自ら課題を発見し、体験を通して理解を深め、自分に出来る貢献を考える「発信型プロジェクト学習」だ。9年間の系統的な活動で、地域や社会の一員であるという意識を生み出し、行動する力を育んでいる。

取り組みのねらい

- 友だちとの意見交換を通して、自分の考えを深める力を育てる
- 周囲とのかかわりを通して、相手を思いやる心を育む

取り組みの内容

- 自ら問題を発見して理解を深め、自分に出来る貢献を考える発信型プロジェクト学習を行う
- 子どもの実態を踏まえ、学園全体で教科ごとに課題を洗い出し、各学年で付けたい力を明確にする
- 9年間を通して育てたい姿を、小中の教師全員で共有し、各学年の学習内容を構成する

取り組みの成果

- 自分で課題を見付け、自分なりに一生懸命考え、主体的に学習する姿が見られるようになった
- 友だちとのかかわりによって、思考を深めると共に、自分の考えを伝えようとする意識が付いた
- 上級学年を目標とし、自分の成長を見通して学ぶようになった

School Data

◎1974（昭和49）年、筑波研究学園都市の最初の小学校として開校。1977年、全国で初めて学習にコンピュータを導入し情報教育を開始。2011年から小中一貫教育研究つくば市大会研究指定校。

校長　田村実枝子先生
児童数　649人　　学級数　25学級（うち特別支援学級4）
所在地　〒305-0032　茨城県つくば市竹園3-13
TEL　029-851-2032
URL　http://www.tsukuba.ed.jp/~takezono-east-e/
公開研究会　2015年11月10日（火）予定

取り組みのねらい　友だちとかかわる中で考えを深め、思いやりを持ってほしい

つくば市立竹園東小学校は、大学や研究機関が集まる筑波研究学園都市の中心部にある。筑波大と共同開発した情報教育のプログラムを行ったり、外国籍や帰国児童が多い環境を生かして国際理解教育を進めたりするなど、先進的な教育を推し進めてきた。田村実枝子校長は次のように話す。

「教育熱心な保護者が多いこともあり、子どもの基礎学力は総じて高い状況です。地域の教育資源を生かした教育活動を行い、子ど

社会を生きる力を育む――地域、家庭とつくるキャリア教育

もたちの興味・関心を深め、その力を更に高めることに力を入れています」

つくば市では、2012年から、中学校の各校区を「学園」とし、小中一貫教育を推進している。同校は、竹園東中学校と竹園西小学校と共に「つくば竹園学園」を構成する。同学園は小中一貫教育の開始に伴い、子どもの実態を踏まえて課題を整理した。根本智教頭は子どもの様子を次のように説明する。

「自ら学ぼうという姿勢が見られますが、友だちとの意見交換をして、自分の考えを深める力がやや弱いと感じました。自分をしっかり持っている一方で、もっと周囲への思いやりを持てたらと思うことがありました」

取り組みの内容

3ステップで考えを深め、共有しさまざまな生き方に触れる

つくば市が進める小中一貫教育の軸となるのは、21世紀型スキルの育成を目指す発信型プロジェクト学習「つくばスタイル科」だ。コア・カリキュラムの「環境」「キャリア」「歴史・文化」を中心に、9年間を系統化したプログラムを作成。文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、「総合的な学習の時間」や生活科、特別活動などを組み替えて活動を行っている。

「つくばスタイル科」の授業は、「IN（課題を見付ける）」「ABOUT（情報を集める）」「FOR（何が出来るか考え、発信する）」の3つのステップで進める発信型プロジェクト学習を基本とする。例えば、6年生のキャリア単元「広げよう！　夢・希望」の流れは次のようになる。

①IN…課題発見

自分が知っている仕事を発表したり、他の仕事を本で調べたりした上で、家族や知り合いに仕事のやりがいや苦労、仕事に対する考えなどインタビューをする。働くことについて、人によってさまざまな思いや考えがあることに気付く。

②ABOUT…交流・協働／まとめ

子どもが地域とのかかわりを感じられるよう、企業や研究所、地域の人を招いてインタビューをしたり、地域の企業や商店を訪問し職場見学をしたりして、働く人の生き方や考え方に触れる。学んだことをワークシートにまとめて報告会を行い、自分の職業観を深める。子どもたちはインターネットや本などからも情報を集め、収集のコツを伝え合いながら情報収集力を身に付けていく。

③FOR…提案・発信／実践

テレビ会議などを活用し、竹園東中学校と竹園西小学校の子どもと意見交換を行う。多様な意見を聞いた上で、職業観や生き方について、自分の考えをまとめる。また、地域社会の一員として、自分が目指す生き方や職業を思い描き、今の自分に必要なことややるべきことを考える。学習の振り返りにとどまらず、学んだことを自分自身や社会に結び付けるのがポイントだ。

次の単元の①IN…課題発見

自分が目指す生き方をグループで発表し、友だちと意見を交わし、更に考えを深める。

つくば市立竹園東小学校校長
田村実枝子 たむら・みえこ
「校長として、子どもたちが未来への夢を育みながら、楽しく学べる学校をつくりたい」

つくば市立竹園東小学校教頭
根本　智 ねもと・さとし
「子どもはもちろん、先生方にとっても安心感や温かさを感じられる居心地の良い学校をつくりたい」

つくば市立竹園東小学校
永岡範之 ながおか・のりゆき
研究主任。「子どもにはそれぞれ違った良さが必ずある。それを毎日のかかわりから見付けたい」

つくば市立竹園東小学校
谷山友香 たにやま・ゆか
つくばスタイル科学園主任。「気持ちよいあいさつを交わして心と心をつなぎ、出会いを重ねていきたい」

つくば市立竹園東中学校
川俣　純 かわまた・じゅん
つくばスタイル科主任。「子どもたちが学んだことを生かして次の授業をつくり、学びを積み上げていきたい」

活動を振り返り、3年後の自分に手紙を書く。学習内容を基に次の単元の「IN」を設定することで、学びの連続を持たせ、関心や意欲を高めている。

中学生のキャリア単元に参加し憧れの気持ちや目標を持たせる

各学年の学習内容は、9年間を通して育てたい姿を教師全員で共有した上でつくり上げている。キャリア教育における目指す子どもの姿は、「自分らしさや自分の良さに気付くと共に、社会の一員としての役割や仕事の価値観などを考えていく」というものだ。竹園東中学校のつくばスタイル科主任の川俣純先生はこう語る。

「キャリア教育では、家族や友だち、そして地域の人々とのかかわりへと活動を広げていきます。9年間を見通して学習の流れを整理しているため、学びがスムーズに積み上げられ、小学校で学んだ内容を中学校でも重複して行うということがありません」

例えば、中学校では一般的に2年生で事業所での職業体験を実施するが、つくば竹園学園では、13ページで紹介した6年生のキャリア単元「広げよう！　夢・希望」を踏まえて7年生（中学1年生）で行う。そうすることで、8年生（中学2年生）で、キャリア教育の集大成として、つくば市が毎年開催するイベント「ランタンアート」に企画から参加する時間を確保している。

「職業体験では、受け入れ先にお客様のように扱われ、『自分は地域の役に立った』といった実感が生まれにくいことがあります。そこで、もう一歩踏み込み、活動に主体的に参加することで、地域や社会の中で行動する力を育てたいと考えています」（川俣先生）

「ランタンアート」には、4年生も参加する。8年生の提案を基に、竹園西小学校の子どもとも意見交換をして自分たちなりの計画を立て、リハーサルに参加する（**写真**）。8年生の姿を目の当たりにすることで、身近な目標として意識させ、憧れの気持ちを抱かせたり、中学校の学習への期待感を高めさせたりすることをねらいとしている。

9年間の学びの系統表を作成し各学年で付けたい力を明確化

9年間の学びの連続性を持たせるために、つくば竹園学園では独自に「学びのスキル系統表」を作成している。これは、子どもの実態を踏まえて教科ごとに課題を洗い出し、9年間で付けたい力を明確にして、各学年の指導方針を定めたものだ。

系統表の作成は、各校から教科ごとに代表者が集まって話し合い、その結果を各校の教科部会にフィードバックし、更に検討を重ねるという流れで進めた。つくばスタイル科学園主任の谷山友香先生は次のように話す。

写真　「ランタンアート」のリハーサルは、4年生と8年生（中学2年生）が一緒に作業を進める。4年生が自分たちの計画に基づいて、8年生に提案をする場面を設けるなど、活動に主体的にかかわれるように工夫している

「それぞれの学校や教師に『こんな力を付けたい』といったさまざまな思いがあるので、課題や付けたい力を絞り込む作業が大変でした。子どもの実態は常に変化していますから、系統表が『完成』することはなく、いつも検討と改訂を重ねなくてはなりません」

作成に掛かった苦労は小さくないが、その過程で教師が得た気付きには大きな意味があったという。

「9年後にありたい姿をイメージして課題や付けたい力を検討し、各学年の指導に落とし込んでいくという作業そのものが、貴重な教材研究や授業づくりとなりました。こうした作業を経て、自分の教えていることが9年間のどこに位置するかを強く意識して指導で

きるようになったのです」（根本教頭）

14年度は、子ども向けのスキル系統表の作成に取り組んでいる。

図　「つくばスタイル科学びのスキル系統表」（2014改訂案）　4年、6年、9年を抜粋

	IN	ABOUT	FOR
4年	・自分の生活と社会の関係を考え、課題を見いだすことができる（A2） ・新たな自分の役割に期待をもつことができる（A1）	・様々なメディアの活用と体験活動を通して必要な情報を集めることができる（E1） ・集めた情報を項目を立てて整理し、分かりやすくまとめたり、発表したりすることができる（A1、D1） ・学園内の上級生や下級生との意見交換を通してよりよい方法を見出し、考えを深めることができる（B2、C2、D1、D2）	・自分の考えや提案を地域へ発信することができる（D1、F2） ・考えたことを自ら実践し、地域社会の一員として行動することができる（C1、F1）
6年	・身近な人との関わりから職業について考えることができる（A2） ・調べたことを基に課題を設定し、自分の将来にどうつなげていくかを考えることができる（A1）	・複数の情報を比較しながら調べることができる（E1） ・働く人とコミュニケーションを図りながら工夫や努力を知り、友だちや中学生との意見交換を通して自分の将来への考えをまとめていくことができる（D2）	・自分たちの考えについてテレビ会議などを通して他校の児童生徒と意見交換ができる（D1、D2、E2） ・将来の夢や希望を持ち、その実現を目指して努力することができる（F2）
9年	・つくばや日本の魅力と課題を考えることができる（A2、B1） ・つくばや日本のために何ができるのか考えることができる（A1）	・収集した情報を基に、世界平和のために自分たちにできることを考え、自分たちなりのアイデアを実現することができる（B1、B2、C2、D1、D2、E2）	・「つくば市への提言」という形で自分たちの考えや学習の成果を発信できる（C2、D1、D2、F1） ・つくばや日本、世界平和のために協力して行動することができる（D2、E2、F1）

つくば次世代型スキル　●問題解決　A1 客観的思考力　A2 問題発見力　●自己マネジメント　B1 自己認識力　B2 自立的修正力　●創造革新　C1 創造力　C2 革新性　●相互作用　D1 言語力　D2 協働力　●情報ＩＣＴ　E1 情報活用力　E2 ＩＣＴ活用力　●つくば市民　F1 地域や国際社会への市民性　F2 キャリア設計力

1～9年生の系統表のうち、3学年分を抜粋したもの　＊同校の資料から一部抜粋して編集部で作成

「系統的に力を付けるためには、子ども自身が9年間で目指す姿をイメージし、自分の成長を見通して学習に取り組むことが大切ではないかと考えています。教師用の系統表を土台として、各学年で付けたい力を子どもたちにも分かりやすいように説明しています」（谷山先生）

子ども向けのスキル系統表は、教科書に貼るなどして、子どもが常に意識できるようにしている。研究主任の永岡範之先生は活用の仕方について次のように説明する。

「例えば、算数・数学では、どのような言葉を使えるようになれば、論理的な思考力が高まっていくかといったことを伝えています。子ども自身が系統表を見ながら言葉を獲得することもありますし、誰かが何気なくつぶやいた言葉に、『今、分かりやすい言葉を使ったね』などと、教師が広げることもあります」

教科によって体裁は異なり、つくばスタイル科では3ステップ（IN、ABOUT、FOR）ごとに付けたい姿勢や力を整理している（図）。各学年でどのような状態を目指すことがつくば次世代型スキルの獲得につながるのかを共通認識して、学習を積み上げていく。

取り組みの成果

一生懸命考えて伝え合う姿勢が見られるように

発信型プロジェクト学習は、一人ひとりが自分の課題を見付け、考えを深め、発信するのが基本的な流れとなる。主体的にならざるを得ないため、子どもたちは自分の能力に応じて一生懸命に取り組む姿が見られる。

グループ活動を通して良い見本を示し合うような場面も多いため、友だちとのかかわりを通して思考を深めると共に、自分の考えを伝えようとする姿勢も育ってきた。

「学力にかかわらず、粘り強く説明しようとする姿が見られます。そうした姿勢が中学校へとつながっていくのだと思います。普段から中学生が毅然とした態度で話す姿を見る機会が多く、目標を抱きやすいこともプラスになっています」（永岡先生）

子どものスキル系統表は試行段階であるが、今後、子どもへの影響を見極め、教師用の系統表も見直していきたいと考えている。更に、キャリア教育をはじめ、学んだ内容が社会で生きる力につながりやすくなるよう、家庭との協力関係をより強める方法を模索する考えだ。

ものをつくり売る起業体験で働く厳しさと本質を体感する

静岡県 浜松市立元城（もとしろ）小学校

浜松市立元城小学校は、11年前から、子どもたちが模擬会社を設立し、木工製品を製作して地域住民に販売するキャリア教育を継続している。企画、製作、販売と、どの過程も子どもたちにとっては初めての体験ばかりで、いくつもの困難に直面するが、子どもがそれぞれ自分の強みを生かして乗り越えていくという。

取り組みのねらい

- 「ものづくりの町」として栄えてきた浜松市の地域性を理解する
- ものづくりに求められる姿勢や働くことの意義を理解し、感謝の気持ちを育む

取り組みの内容

- 地域の企業や商店の協力を得て、６年生がものづくりの起業体験をする
- それぞれの子どもが強みを生かし、グループで模擬会社を運営する
- 「商品完売」という目標に向けて、子ども自身が考え、決めながら困難を乗り越える

取り組みの成果

- 活動が進むにつれて、仕事の厳しさや面白さを理解し、真剣さが増していった
- 仲間で力を合わせることの大切さに気付き、人間関係が良好になった
- 売り手の立場を体験し、商品に込められた思いや社会の仕組みを理解した

取り組みのねらい

ものづくりや新しいことに挑戦する精神を育てたい

浜松市立元城（もとしろ）小学校は、市中心部の市街地にあり、美術館や図書館などの周辺施設を生かした教育活動を展開している。２００９年に、市内のどこからでも通える小規模特認校となり、現在は半数近くの子どもが学区外から通学する。原田哲良校長は次のように話す。

「本校は14年度に開校１４２年目を迎えた伝統校で、学区外に住む卒業生が誇りや愛着を持って子どもを通わせるケースがよく見られます。さまざまな地域から集まることもあ

School Data

◎1873（明治６）年、第一番小学校として開校。浜松城の東隣に位置し、校庭から間近に天守閣を望む。2012年にキャリア教育で文部科学大臣表彰を受けた。2017年、小中一貫校となる予定。

校長	原田哲良先生
児童数	296人
学級数	13学級（うち特別支援学級３）
所在地	〒430-0946 静岡県浜松市中区元城町102-1
TEL	053-453-4128
URL	http://www.city.hamamatsu-szo.ed.jp/motoshiro-e/
公開研究会	未定

り、多様な価値観を受けいれ、優しさや思いやりの心を持って友だちに接する子どもが多いと感じます」

教育熱心な家庭が多く、学習に前向きに取り組む子どもが多いが、やや粘り強さに欠けたり、人の意見に影響されやすかったりすることが課題と捉えている。

同校のキャリア教育は、「市民力の育成」を目標に掲げ、学びや働くことの意義や喜びを実感させると共に、ものづくりや新しいことに挑戦する精神を養う活動に重点を置く。

「地域社会に触れながら、地域の良さを理解して、市民として主体的にかかわっていく力の育成を目指しています」（原田校長）

キャリア教育が本格的に始まる3年生では、隣りにある浜松城公園について調べ、市の公園課の担当者を招き、もっと良い公園にするための提案をする。4年生は、主に福祉の観点から地域の施設が人に優しいものであるかを検討し、5年生は環境問題を身近なテーマとして掘り下げて考える。

これら一連の活動の集大成となる6年生では、「総合的な学習の時間」の全70時間を充て、「元城キッズチャレンジビジネス」に取り組む。これは、子どもが数人ずつのグループに分かれて模擬会社を設立し、木工製品の企画・製作・販売を行う活動だ。浜松市は、自動車や楽器メーカーの本社があるなど、「ものづくりの町」として栄えてきた。本格的なものづくりに取り組むことで、そうした地域の特長を深く知ると共に、ものづくりに求められる姿勢や働く意義を理解し、感謝の気持ちを育むことをねらいとしている。

「本活動は、地域の企業や商店の協力を得て04年に始め、今年で11年目となります。今では保護者や地域にも広く知れ渡り、自慢の活動になっています。また、子どもにとっても、6年生になったら本活動に取り組むことが楽しみとなっています」（原田校長）

取り組みの内容

社長、販売部長など、各自の強みを生かして一人一役

「元城キッズチャレンジビジネス」の手順はP.18図1に示したとおり。4月に職業調べや自分の将来を考えることから始まる。修学旅行では、伝統工芸品づくりなどを体験し、ものづくりへの関心を高めていく。そして、木工製品メーカーの会長から木工製品の魅力を聞き、工場見学をして製造工程を学び、会社社長から企業の仕組みについて教わるという、活動に必要な知識を一通り学んだ後、5人程のグループで「会社」を設立する。

会社には、通常の企業と同じように、社長、販売部長、広報部長、製作部長、経理部長といった役職を設け、一人一役を担う。人と話すことが好きな子どもは営業活動などを行う販売部長、絵が得意な子どもはポスター制作で中心となる広報部長というように、それぞれの強みを生かして役職を決めていく。

会社を設立したら最初に行うのは商品企画だ。商品は木材を使うとだけ決まっていて、後は自由。社内で話し合い、企画が出来たら木工製品メーカーの会長にプレゼンテーションをする。会長からの指摘を踏まえ、段ボールで試作品を作り、仕様書を作成して、材料を発注する。材料が届いたら自分たちで商品を製作し、それと並行して、地域の商店主から宣伝広告の方法を学んでポスターを作ったり、接客マナーを教わったりして、予行練習として5年生に模擬販売を実施する。そして、いよいよ2月、地域の商業ビルの一角を借り

浜松市立元城小学校校長
原田哲良 はらだ・てつよし
「教育は、信頼と人なり。校長として、子ども、保護者、地域の方々から信頼される学校をつくりたい」

浜松市立元城小学校
竹村元清 たけむら・もときよ
教務主任。「先生方が明るく仕事が出来る環境を整えて、子どもが明るく、楽しい学校にしていきたい」

浜松市立元城小学校
天野 薫 あまの・かおり
6学年担任。「自分が教えるだけではなく、常に子どもから教えられていることを忘れない」

て、商品を販売。最後に、決算を行い、振り返り活動で幕を閉じる。

目標は完売！「社員」全員で力を合わせて取り組む

商品は主に小物入れ、写真立て、ブックスタンドなどで、一社ごとに2種類の商品を約20個作る。目標は完売だ。活動当初、子どもたちは「売れるだろう」と簡単に考えているが、活動中にさまざまな困難に直面し、次第にものを作り、それを売る厳しさを実感していく。

「商品企画の段階では『こんな機能があったら面白い』などと思い付きでアイデアを出していきますが、プレゼンテーションでは企業から『本当に売れるか』『実際に製作できるか』などと厳しい指摘を受け、自分たちの考えが甘かったと気付きます。また、商品の良さをうまく説明できずに悔しい思いもします。そうした体験を通して、ものを作り、売ることは想像以上に難しいと理解していくのです」（原田校長）

製作では、材料の組み立てやヤスリがけ、ニス塗りなど子どもが初めて体験することも多く、また、一つひとつの工程に手を抜くことは許されないため、放課後の遅くまで作業をする会社もある。販売では、客に商品を手に取ってもらうためには声掛けや展示にも工夫が必要であることを痛感する。

「目標達成のハードルは高く、全員が力を合わせなければ、達成できません。普段の人間関係や学力などに関係なく、どの子どもも懸命に取り組む姿が見られます」（原田校長）

図1　6年生「元城キッズチャレンジビジネス」の流れ

4月	将来、なりたい職業について調べ、まとめる。
6月	修学旅行で伝統工芸品づくりをする。
7月	木工製品メーカーの会長から、木工製品の良さを学ぶ。
夏休み	どんな商品を売りたいかを考える。
9月	工場見学を通して木工製品の製造工程を学ぶ。
10月	地域の会社社長から、会社の仕組みを学ぶ。 学級でグループに分かれ、会社を設立する。
11月	会社ごとに商品開発をする。 木工製品メーカー会長へのプレゼンテーションを通して、商品の細かい仕様を考える。 学区の商店街で商品のリサーチを行う。
12月	仕様書を作り、材料の発注をする。 地域の商店主から、宣伝広告の方法を学ぶ。
1月	木工製品メーカー会長から製造方法を学び、商品を製作する。 地域の商店主から、接客の心得を学ぶ。
2月	収支を考慮して、価格を決定する。 地域のデパートで販売する。
3月	決算を行う。 これまでの学習を振り返り、自らの生き方や夢について考える。

＊同校の資料を基に編集部で作成

写真1　子どもたちは「良いものをつくりたい」と、意見を出し合う。最初は思いつくままに発言している子どもたちも、実現が難しいと分かると、次第に発言に真剣みが帯びてくる

写真2　木工製品メーカーの会長に商品の説明をし、そこで得た助言を基にして、段ボールで試作品を作る。この会社が作っているのはキースタンド。実際に鍵の束を入れて、使い勝手を確かめる

完売後、他グループを自主的に手伝い始める子どもたち

教師はサポート役に徹し、自由に活動させて、子どもの主体性を引き出している。例えば、商品の個数や価格などは子どもに任せている。教師は「昨年の会社は○個販売したみたいだよ」「売れる自信があるなら、高くし

てもいいかもよ。でも、高過ぎると売れないかもしれないね」などと、考えるためのヒントを提示する。6学年担任の天野薫先生は次のように方針を説明する。

「価格が明らかに高過ぎる場合など、指摘することもありますが、基本的には全て子どもに任せます。自分たちで決めることを積み重ねるうちに商品への愛着が生まれて、『もっと良い商品にしよう』という気持ちが強くなり、更に真剣になっていきます」（写真1）

段ボールで試作品を作る場面では、キースタンドを製作する会社の子どもが、自分で家から持ってきた鍵の束を何度も掛けて、「ここを高くした方が使いやすい」「作りが複雑過ぎる」などと議論を交わしていた（写真2）。

迎えた販売当日、自社の商品が完売したら、他社を手伝う姿が見られた。そして、全商品が完売すると、大きな拍手が自然と沸き起こった（写真3）。

写真3　商品は500～1000円で販売。完売する年が多いが、天候などの条件によって売れ残る場合もあるという。また、保護者が買い占めるような事態を防ぐため、終了1時間前までは保護者には購入を控えるよう伝えている

「困難な環境にあっても、子どもが自分たちで考えてやりきることを支えるのが、教師の役目です」（原田校長）

取り組みの成果
本気で大人とかかわる中で仲間と協力する大切さに気付く

原田校長は、赴任当時、「小学生がここまで本格的な活動をする必要があるのか」と疑問を持ち、また、「総合的な学習の時間」を全て費やすことへの重圧も感じていたという。

「子どもは、ビジネスに携わる大人の生の話を聞き、実際にものづくりの厳しさを実感するにつれて、次第に目付きが変わり真剣みが増していきます。そうした姿を目の当たりにして、子どもの将来にとって大きなプラスとなる活動だと確信しました」（原田校長）

何気なくしていた買い物だが、売る立場を経験することで、商品に込められている思いや社会の仕組みへの理解も深まる。こうした学びは深い体験をするからこそ得られるもので、「ごっこ遊び」では難しいだろう。活動を11年間続けてきたのは、そうした実感が教師にあったからに他ならない。また、継続することで、活動に対する地域からの理解も深まり、毎年、買いに来る住民もいるという。

活動が子どもの人間関係に及ぼす影響も大きい。教務主任の竹村元清先生はこう話す。

「特に単級の学年では、人間関係が固定しやすく、過去の問題を引きずってしまうこともあります。しかし、活動では『力を合わせないと会社は回らない』『ケンカをしている場合ではない』などと気付き、自然と協力し合う姿が見られます。それぞれ得意なことを生かして補い合いながら進むため、全ての子どもに活躍の場面があります」

高学年になると学校行事に主体的にかかわる機会も多いが、普段は触れ合わない大人と接する地域に出ると、「仲間と力を合わせよう」という気持ちが生まれやすくなる。そうした状況で、苦労や喜びを分かち合う中で、深い人間関係が築かれていく。

課題は、地域との交渉や連絡など、6年生の担任に負担が偏りやすいことだ。そこで、他の教師の協力を得られやすくするように、学校経営目標における活動の位置付けを、改めて教師全員で共有した。また、14年度は5年生の後半から活動を始め、6年生の2学期までに活動がほぼ終わるように教育課程を見直した。1人の教師に負担がかかり過ぎないようにすると共に、6年生の後半は卒業後を見据え、自分の将来について考える時間を増やしている。

「今後、地元の商店街で販売できるように調整を進めています。より地域に根ざした活動にして、活動の輪を広げ、教育効果を高めていきたいと考えています」（原田校長）

リアリティーや達成感を重視し「仕事は楽しい」という原体験を

キッザニア（KidZania）

年間延べ160万人が来場する職業・社会体験施設「キッザニア」。社会や職業をリアルに再現した体験プログラムを通し、子どもの仕事に対するイメージがポジティブなものへと変化する。どのような工夫により、子どもから前向きな気持ちを引き出しているのだろうか。

体験を楽しみながら社会や仕事について学ぶ

「キッザニア」は、世界13か国16か所（2014年12月現在）に展開する職業・社会体験施設で、日本では06年に「キッザニア東京」、09年に「キッザニア甲子園」がオープンした。スポンサー企業が出展するパビリオンで、3～15歳の子どもが職業を体験でき、現在、2施設合計で年間延べ160万人が来場する。体験できる職業・役割は、消防士や新聞記者、銀行員、研究者、販売員、理容師など、90種以上に上る。仕事の報酬として支払われる専用通貨「キッゾ」は、施設内で買い物をしたり、携帯電話を借りたり、習い事をしたりするのに使え、また、銀行口座を開設して預金できる。キッザニアは、社会や経済の仕組みが凝縮された小さな「街」なのだ。

キッザニアのコンセプトは、「エデュケーション（学び）」と「エンターテインメント（楽しさ）」を組み合わせた「エデュテインメント」という造語に表される。経営企画本部マーケティング部の関口陽介部長はこう説明する。

「仕事をしてお金を稼ぎ、モノやサービスを購入するという、大人には当たり前の行動は、子どもにとってはとてもわくわくする体験となります。学習ではなく、楽しい体験を通し、社会や経済の仕組みを理解し、社会への期待感を育てたいと考えています」

警察官ならパトロールをしたり、ピザ職人なら生地を伸ばしてトッピングをしたり、それぞれのプログラムは目的や成果が見えやすく、達成感が得られるように構成されている。

「仕事は、人とのかかわりや社会に対して意味があるからこそ成立することを感じ取ってもらいたいと考えています」（関口部長）

キャリア教育の視点で開発した学校向けプログラムも

キッザニアが学校向けに開発した「キャリア教育実践プログラム」を、「総合的な学習の時間」などに充てて活用する小学校もある。専用のワークシートを使い、事前学習では、働くことについて考え、職業を調べ、キッザニアでの行動計画を作成する。事後学習では、

●「キッザニア」概要

KCJ GROUP 株式会社がキッザニア東京・キッザニア甲子園を企画・運営する。2施設とも、約60のパビリオンで90種以上の職業・社会体験が出来る。対象年齢は3～15歳。大人はパビリオンへの立ち入りや体験は出来ない。下記のウェブサイトでは、パビリオンや体験できる職業・役割の紹介のほか、学校での活用事例も見ることが出来る。

http://www.kidzania.jp

経営企画本部
マーケティング部 部長
関口陽介
せきぐち・ようすけ

振り返りの発表や話し合いをし、働くことについて改めて考え、将来へのイメージを膨らませていく。プログラムを通して、子どもの仕事に対する印象は好転するという。体験の前後で出現するワードを分析すると、体験前には「残業」「つらい」などネガティブな言葉が多いが、体験後は「楽しい」「おもしろい」「笑顔」など、ポジティブな言葉が目立つ（図）。

「子どもにとって身近な職業を調べたり、振り返りをしたりすることで、職業体験を1日だけの遊びにせず、深く残る体験となるように提案しています」（関口部長）

社会と同じようにプログラムには異年齢で取り組む

各地の商工会議所の会員などが見学に訪れ、これほど多くの子どもが集まり、生き生きと取り組める理由を聞かれることも多いというが、それに対して関口部長は「プログラム開発力が大きい」と話す。プログラム開発において最も重視しているのは、「安心・安全」と「リアリティー」だ。

「安心して安全に体験できるのは当然のこととして、リアルであるほど子どもは真剣に取り組みます。スポンサー企業の理念、社内規定から、制服、言葉遣い、立ち居ふるまいまで忠実に反映しています」（関口部長）

更に、「楽しさを感じられる」「達成感を得られる」「自分なりのアレンジが出来る」「大人扱いをする（人格を大切にする）」なども、子どもの気持ちを引き付ける要素として重視している。3～15歳の子どもが同じチームで体験するのも、社会をリアルに再現するための工夫だと、関口部長は説明する。

「社会では、年齢や経験、能力が異なる人が集まって仕事を進めます。異年齢の交わりによって、年長者が年少者を支援する場面が自然と生まれます」

施設では1人の大人として扱われ、保護者が一緒に体験したり、パビリオンの中に入ったりすることは出来ない。子どもは自分の意思で自由に行動する中で、責任感や自立心、主体性が芽生えていく。子どもが保護者の抱いていたイメージとはかけ離れた職業体験を選び、驚くこともよくあるという。

「本来、キャリア教育は地域全体で進めるのが理想と考えていますが、地域の事情によって、多様な職業に触れる体験を用意するのは限界があるでしょう。また、さまざまな教育活動があり、多忙を極める先生方が各職種の体験プログラムを考えるのも現実的ではありません。そうした点で、キッザニアがリアルな社会や仕事に触れる入り口になれればと考えています」（関口部長）

図　キッザニア体験前と後での出現ワードの違い

	体験前	▶ 体験後
1	大人	楽しい
2	アルバイト	考える
3	スーツ	おもしろい
4	残業	成功
5	下克上	笑顔
6	転勤	学ぶ
7	つらい	興味
8	かせぐ	大切
9	きる	コミュニケーション
10	お父さん	せきにん
11	てつ夜	絆
12	倒産	うれしい
13	クールビズ	みんな
14	疲れる	大きい
15	歩く	責任
16	てんきん	感謝
17	酒	敬語
18	めんどくさい	やりがい
19	赤字	命
20	電車	アイデア

キッザニアでの体験前には、保護者や社会から影響を受けたと推測される名詞が中心だが、体験後は自分自身の感覚で捉えた動詞が多い
出典／ＫＣＪ ＧＲＯＵＰ株式会社「キッザニア白書 2014」

特集取材を終えて

保護者が小学校にキャリア教育を求める傾向が強くなっている（P.4）――本特集を考えるきっかけとなった調査結果です。変化の激しい社会を背景に、将来子どもが納得のいく進路を選べるようにという思いがあるのでしょう。一方で、先生からは「自分さえよければよいという子どもや保護者が増えている」と伺うことがあります。我が子を守ろうとする気持ちがそのような子どもを増やしているのだとしたら、それは残念なことです。キャリア教育で育みたいのは、「自分のために」から「人のために」という姿勢かもしれません。その思いは、地域や社会のために行動できる力につながっていきます。キャリア教育は効果がすぐに表れるものではなく、息の長い取り組みです。それでも「本気になっている子どもたちを見ていると、大変だとは感じない」と笑顔で話された先生方が印象的でした。

VIEW21 小学版編集長　杉田美穂

タブレットによる意見交流で発信力を育み、思考を深める

東京都杉並区立桃井第三小学校

5年生以上に1人1台のタブレット端末を貸与し、それを活用した授業を始めた杉並区立桃井第三小学校。活用を始めてまだ数カ月しか経っていないが、既に教師はさまざまなメリットを感じているという。タブレットを活用することは、教師の授業や子どもの学びの質を高める上でどのような可能性を秘めているのだろうか。

杉並区立桃井第三小学校では2014年9月から、5・6年生に1人1台タブレット端末を貸与し、教育活動に活用している。この日、6年生の算数の授業は「拡大と縮小」の単元で、「拡大図のかき方を考えよう」がテーマ。先生から示された三角形を2倍に拡大して描くためにはどうすればよいのか、子どもはまず1人で方法を考える。その方法を手元のタブレットに書き込み、先生のパソコンに送信する。すると、一人ひとりが書き込んだ結果が、教室の前にある電子黒板に映し出された（**写真1**）。1辺の長さとその両側の角度を測り、拡大図を描いた子どももいれば、1つの角度の大きさを生かして2辺の長さを2倍にした子どももいる。全員の結果がそろうと、担任の今城卓也先生は電子黒板を見ながら、「いろいろな描き方があるね。では、これとこれを比較してみようか」と、2人の例を拡大した（**写真2**）。そして、「Aさん、ちょっと説明してみて」と子どもに発言を促す。この日の授業はこのように進んでいき、後半では縮図を描いた。

今城先生は、「タブレットが子どもに貸与されてから、授業の方法が変わったと思います」と話す。三角形の拡大図を描く場合、従来、教師は子どもがノートに拡大図を描く様子を机間巡視をして、どのように描いているのかを確認していた。その方法では、時間的な制約もあり、全員の様子を把握することは難しかった。

しかし今は、ソフトを活用すれば、子どもがタブレットに書き込んだ結果が、瞬時に電子黒板に映し出される。どの子どもがどのような考え方で答えを導き出したのかを、容易に把握できるようになった。また、悩んでいる子どもには、その子どものタブレットだけにヒントを送信することも可能だ。

意見交換のしやすさが気付きを促す

今城先生は、タブレットの活用について、他に3つの利点を挙げる。

1つめは、いろいろな子どもから発言を引き出しやすくなったことだ。通常の授業では、自ら挙手をして発言をする子どもが注目を集めやすい。おとなしい子どもの中

School Data

東京都杉並区立桃井第三小学校

◎1928（昭和3）年開校。2011年度から杉並区教育委員会教育課題研究指定校として「学習活動を活性化するためのＩＣＴの活用の工夫」に取り組む。 **校長** 末永弘先生／**児童数** 540人／**学級数** 21学級（うち特別支援学級3）／**所在地** 〒167-0042 東京都杉並区西荻北2-10-7／**TEL** 03-3399-3135／**URL** http://www.suginami-school.ed.jp/momo3shou/

Teachers

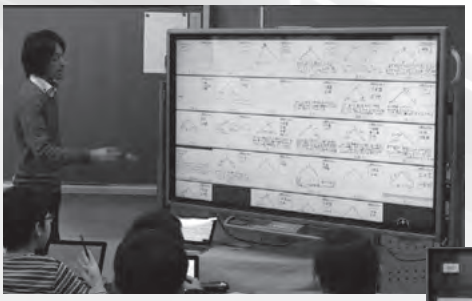
杉並区立桃井第三小学校校長
末永 弘
すえなが・ひろし　「常に共感しながら話を聞き、先生方と信頼関係を築いていくことを大事にしている」

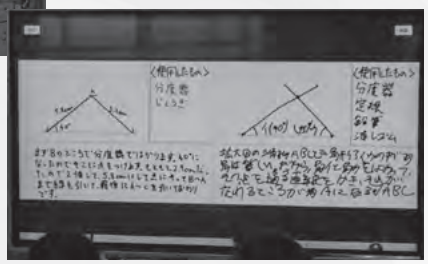
杉並区立桃井第三小学校
上野真喜子
うえの・まきこ　研究主任。理科専科。「一人ひとりの子どもが輝く授業をし、全ての子どもの長所を引き出していきたい」

杉並区立桃井第三小学校
今城卓也
いましろ・たくや　研究副主任。6学年担任。「今のためではなく、未来のために今をどう生きるかを、子どもが考えられるような指導を心掛ける」

にもよい意見の持ち主はいるはずだが、目立たない存在になりがちだ。ところが、電子黒板には全員の答えが表示されるので、教師はそれを見ながら、普段は発言数が少ない子どもを意識的に指名することが可能になる。また、子どもは、自分の考えが既に前に表示されているので、安心して発表できる。

2つめは、子どもが互いに学び合う場面が増えたことだ。子どもは電子黒板に映し出された友だちの答えを見て、「そういう考え方があるのか」と気付き、自分の意見を自ら修正する。そのように、互いに刺激を受け合いながら、自分の意見を見直していくうちに、どんどん考えが深まっていく。





上／写真1　子どもがタブレットに描いた三角形の拡大図が次々と送信され、電子黒板に映し出される。今城先生はそれを見ながら、次の指導展開を考える　右／写真2　答えの導き方が違う2人の子どもの拡大図を電子黒板上にピックアップ。両者を比較しながら拡大図への理解を深めていくことがねらいだ

最後に、タブレットを使ったドリル学習の効果も期待している。習熟度別に問題に取り組めるため、「解ける」「出来た」と一人ひとりが感じられるのだ。

ICTの活用を段階的に深めていく

今では、同校のほとんどの教師がICTを積極的に活用した授業を展開している。研究主任を務める上野真喜子先生は、その理由について次のように説明する。

「5年生以上に1人1台タブレットが貸与されてから数カ月しか経っていませんが、既に先生方が使いこなせているのは、これまでのICT活用の積み重ねがあってのことです」

同校にICT機器が本格導入され始めたのは4年前のこと。当初は「教材を子どもたちに分かりやすく提示するための手段」として電子黒板や書画カメラが用いられた。しかし、活用が進むにつれ、子どもたちがICT機器を使い、話し合いや自分の意見を発表することを目標としていった。そのように、段階的に活用を深めていったから、タブレットが子ども1人1台導入された時もスムーズに対応できたという。

また、そうした積み重ねの中から、授業中にICTを積極的に活用した方がよい場面と、ICTに頼らない方がよい場面についても次第に見えてきたと話す。

「タブレットは、あるテーマについて、授業中に友だちと一緒に考えながら、思考力や表現力、判断力などを伸ばす手段としては有効だと思います。けれども、授業で学んだ結果については、これまで通り、ノートに書くことが大事だと考えています。学んだことをノートにまとめながら、自ら振り返りをすることで、子どもが学びや気付きを自分の中に定着させることが出来るのです」（上野先生）

ICTを活用する授業は、テンポが良く、それだけで子どもが活発に活動をしているように見えがちだ。そこで、末永弘校長は今後の課題として、学習内容の習熟や定着のため、タブレットの家庭への持ち帰りなども視野に入れながら、学力の向上に結び付けるためにはどう活用すればよいのかを検証していきたいと話す。

「既に本校の教師は、校内研究の場面などでの発言を聞いていても、『ICTを授業で使ってみる』という段階から一歩脱しており、『どういうねらいを持って、どんな場面でどうICTを使うのが有効か』という意識で取り組んでいます。他校に先駆けて1人1台タブレットを導入したモデル校として、実践と検証の結果を他校に伝えていきたいと考えています」

読者のページ
Reader's VIEW

2014 Vol.２特集「『学びたい！』意欲を伸ばす言語活動」へのご意見

このコーナーでは、編集部に寄せられた読者の先生方からのご意見をご紹介します。

＊『VIEW21』小学版のバックナンバーは「ベネッセ教育総合研究所」ウェブサイト（http://berd.benesse.jp）でご覧いただけます。

◎本校では、ほぼ全教師が言語活動の重要性を理解して取り組んでいますが、本特集で指摘があるように活動自体が目標になっていると感じます。言語活動は目標達成のために必然的に行うものです。意欲を起こさせるための１つの手段として言語活動は有効であり、しっかりした教材研究と、子どもの伸びる力を発掘する指導が、教師に求められていると思います。　［愛媛県／Ｋ小学校］

◎総論で横浜国立大の髙木展郎（のぶお）教授が言われた「評価の対象となるのは、言語活動そのものではなく、あくまでも活動を通して付いた力です」ということは、頭では分かっているつもりでも、つい忘れがちです。教師が本当の意味での「言語活動」の姿を具体的につかんでいることが大切になると思います。　［山形県／Ｔ小学校］

◎本校でもペアやグループ、学級全体での話し合い活動をいかに組み込むかを考えながら、研究を続けています。秋田県横手市立朝倉小学校の実践のように「皆の言葉がつながっていくのが良い授業」だと考えますが、本校にとっては最大の壁であり、一人ひとりの教師の課題になっています。　［長野県／Ｓ小学校］

◎愛知県高浜市立翼小学校の「自分たちで話し合い、決め、実行する」では、意思決定学習の５つの過程を明確にして取り組むことで、学校内の意識の共有化が図られ、実践につながっていると感じました。　［北海道／Ｍ小学校］

◎子どもの内言（ないげん）にこそ、その子の考えが表れていると思います。内言を把握することはなかなか難しいのですが、千葉県千葉市立海浜打瀬（うたせ）小学校のふきだし法は、とても効果的だと思いました。　［新潟県／Ｓ小学校］

◎「私を育てたあの時代、あの出会い」では、学級崩壊をした学級を立て直すために、徹底した話し合いを行ったことが印象に残りました。子どもの声を聞くと不平や不満など、わがままが露出されがちですが、時間を掛けて、カウンセリングマインドの精神で、根気強く取り組んだ成果だと感じました。　［神奈川県／Ｔ小学校］

◎「Benesse 発　これからの教育」で紹介された「知識構成型ジグソー法」は、他人任せの話し合い活動にならず、一人ひとりの役割・責任が明確になることで、学習効果は高いと思いました。ただ、テーマの選定等、教師の力量が問われる方法だとも感じました。　［沖縄県／Ｋ小学校］

◎「つながる学校と家庭の学び」で紹介された兵庫県姫路市立四郷（しごう）小学校・四郷中学校の取り組みが計画的に行われれば、中１ギャップもかなり解消されるのではないかと思いました。また、「学びの架け橋」は９学年分の学習内容が見通せるので、先を見通しながら子どもへのアドバイスやかかわりが持てるという点で、保護者にとってありがたいと思います。　［群馬県／Ｊ小学校］

【前号（2014 Vol.2）についての訂正とお詫び】
前号 P.20 ～ 21 の記事におきまして、出典の記載漏れと表記の誤りがありました。図２「学習に対する意識（学習観）」の分類は、東京大学の市川伸一研究室で開発された尺度を参考にしていますが、「環境設定志向」にあたるものは内容・名称を変更して「他者依存志向」としています。また、それぞれの志向の質問項目は、ベネッセ教育総合研究所で作成したものです。現在、ホームページに掲載している記事（PDF）は、いずれも修正済みです。関係者の皆さまに多大なるご迷惑をお掛けいたしました。心よりお詫び申し上げます。

子どもは未来

ベネッセ教育総合研究所は、
子どもたちの成長に寄り添う研究と
社会への発信を通して、
一人ひとりが学びに向かい、
今と未来を“よく生きる”ことに貢献します。

ベネッセ教育総合研究所

編集後記

今回の特集や連載取材を通して、地域、家庭、企業といった外部の力を、試行錯誤しながら取り入れている授業を多く拝見しました。現場の先生方からは、やるべき教育活動が多すぎて、やりたくても手が回らないという声を伺います。当研究所も情報発信や調査研究を通して、学校現場の先生方を応援し、地域や家庭とつないでいく一助となれればと思いました。（杉田）

VIEW21 小学版 2014 Vol.3　2015年2月25日発行／通巻第42号

発行人　谷山和成
編集人　小泉和義
発行所　（株）ベネッセホールディングス
ベネッセ教育総合研究所
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太、長谷川敦
撮影協力　荒川潤、川上一生
イラスト協力　幸剛

◎お問い合わせ先
情報編集室
〒206-0033
東京都多摩市落合1-34
電話　042-311-3390

©Benesse Holdings,Inc. 2015

Benesse®

色とりどりの学びの情景

英語で大冒険！

表紙の学校　京都府久御山町立御牧小学校

「English Adventure」では５､６人１組で行動。得意に応じて役割分担もする。取材後はお礼に箸袋など手作りのプレゼントをして記念撮影。帰国後にお礼のメールを送ってくれる人もいる

外国語活動は、ＡＬＴと担任のティーム・ティーチング。２年生のこの日のダイアログは「Can you ～?」。先生がカードを見せて「Can you run ?」と質問すると、「Yes, I can.」と大きな声で返事が！　互いに質問し合うペア活動では、「私もやりたい！」と元気よく手が挙がった

「English Adventure」で出会った人たちの出身国に記念撮影の写真を貼っていく。アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オーストラリアなど世界中に広がっている

久御山町立御牧小学校が文部省（当時）の研究開発校指定を機に全学年で外国語活動を始めて18年。活動では､歌やゲームなどを取り入れ､子どもが耳で聞き、体で意味を覚えることを重視し、留学生や近隣校のＡＬＴを招くなど､アウトプットの機会も多く設ける。

３～６年生が行う「English Adventure」は、京都や奈良の観光地で子どもたちが自ら外国人観光客に「Excuse me.」と声を掛けて行うインタビュー活動だ。「Where are you from?」と聞いて地図に示してもらったり、けん玉を実演して「Let's try！」と試してもらったりと、自分たちが知っている単語を活用して交流を楽しむ。インタビューに答えてくれた外国人は「丁寧な英語で分かりやすかったよ」「頑張って練習しているね」と子どもの頑張りをたたえる。「自分の英語が通じた！」そうした体験の積み重ねが、次への意欲を高め、異文化への関心も深めていく。

過去1年間の特集テーマ
Back Number

2014	Vol.2「学びたい！」意欲を伸ばす言語活動
	Vol.1 学びに向かう土台を築く学級づくり
2013	Vol.4 主体的に学ぶ力を育む──学び方の工夫で学習意欲を高める
	Vol.3 家庭学習で学ぶ意欲を伸ばす

全ての記事を、ウェブサイトからPDFでダウンロードいただけます

http://berd.benesse.jp　または　ベネッセ　研究　で　検索

2015年2月25日発行／通巻第42号
発行人 谷山和成　編集人 小泉和義　発行所 ㈱ベネッセホールディングス ベネッセ教育総合研究所
©Benesse Holdings, Inc. 2015